

英語教師のつれづれ草

英語との出会い

自分史を繙くと、英語との出会いは六歳のときに始まっている。一九四六年、小学一年生のとき、アメリカ兵（G I）が札幌に進駐してきた。主要な建物は接収され、街はG Iで溢れた。当時、市民生活は窮乏を極め、僅かな配給物資を補うために、じゃがいもを植えたり、野草を摘んだりしていたから、お菓子は皆無に等しかった。そんな中でG Iの持っているチューイングガムやチョコレートが子供達の垂涎の的になった。何とかして手に入れようと後を追いつけては「ギミー チョコレット」とせびつたものであった。生活行為としての英語使用の初体験であった。チョコレートの甘さは米国の豊かさの象徴となり、英語はそこに近づく道となった。

こうして戦時中の敵性語は復活して日本国中に溢れた。NHKのラジオ英会話、通称「カムカム英語」はその担い手であった。理解できる年令ではなかったが、「カムカム エヴリバディ ハウデュユデュー アンハワユ」の

テーマソングは今も耳に残っている。新制の中学や高校でも英語教育が一般化し、G I が去った後も受験英語として主として学校教育の場で生き続けることになった。高校生の時、私も二年間ラジオ英会話を聞き続けたことで英語への関心が深まり、大学で専攻した後、高校の英語教師になった。

三八年に渡る英語教育の舞台から降りようとしている今、顧みると英語教師とはどこか役者に似ていた。母国語でもない言葉を操って、授業という芝居の中でネイティヴスピーカーを颯爽と演じて見せたのだった。外国語としての英語を学ぶことの隘路を熟知している日本人英語教師として、学生に英語使用を疑似体験させながら、異文化の世界に眼を開かせようと努めた。英語使用の必要性が少ない状況では、興味こそが学習動機であるから、学生と生きた英語との出会いを演出しようとした。自分自身、少年期の英語との出会いが英語教師への伏線になっていたからである。

異文化体験

終戦時のアメリカ兵との遭遇に始まって、学生時代の外国人教師との交流など異文化と接触する機会はしだいに増えていったが、自分の世界観や生観に影響するほどの劇的な体験にはならなかった。カルチャーショックを含むような異文化体験は教員になって長期の海外生活が可能になってからであつた。

二九歳（一九七〇年）のとき、国際キャンプカウンセラーとしてイリノイ州の湖畔に一ヶ月滞在した。シカゴなどの大都市からやって来る小中学生の十数人とロッジで二週間生活することになった。日本の子供と違って型にはまらたがらない子供達の管理に苦労したが、即席の怪談に怯えながら寝入る姿は何処も同じであつた。キャンプの前後に体験したホームステイでのことであるが、一家への土産として日本から持参したかなり高価な扇子をたまたま幼女に手渡したところ、親からの感謝もなく、幼女の玩具になってしまつ

た。たとえ子供であっても、個人として育てられていることに気づかされたのであった。また、他人に対して言動を控え目にする日本では美德である遠慮が機能しないことも思い知らされた。

三四歳（一九七五年）で一年間休職し、念願かなってミネソタ大学の大学院に留学を果たした。本物の英語を教えたいという動機からESL（第二言語としての英語教授法）を専攻した。米国には英語を学ばなければならぬ移民が沢山いるので、このような学科が生まれたのである。講義形式の授業は少なく、参加型の授業が殆どであったので、事前に参考書を読みデイスカッションに備えなければならなかった。主張と説得が評価され、沈黙は金ならずであった。子育てや教育はそれぞれの文化の基層にある価値観とそれに基づく行動様式の確立を目指す社会的な営みであり、異文化の内部に入り込んだ外国人にも見えない力で同調を迫るので、留学当初はカルチャーショックを覚えることもあった。私の異文化体験は自分を含む日本人の一般的な価値観や行動様式を客観視させ、個人としての生き方にも影響することになった。